別冊１

平成２５年度
広島市専門家評価
評価報告
（尾長小学校）

平成２６年３月

広島市学校評価システム専門家評価
評価委員会

評価報告について

このたび、広島市学校評価システム専門家評価「評価委員会」（以下「本委員会」という。）では、専門家評価（専門家による第三者評価）を実施し、ここに評価報告を取りまとめました。

この専門家評価は、「広島市学校評価システム第三者評価検討会議」の最終報告書で提言された実施方法等に基づいて実施しています。

専門家評価は、各学校の学校経営や教育活動の改善に向けた取組とそれに対する教育委員会の支援について評価し、学校及び教育委員会に対して意見・提言を行うことによって、学校評価の目的を果たす役割を担うものです。そのため、本委員会は、学校における自己評価活動（計画・実践・評価・改善）について専門的見地からより客観的に評価することと、学校に対しては学校経営や教育活動の改善について、また教育委員会に対しては学校への支援について、意見・提言を行うことを役割としています。

本委員会では、今年度、専門家評価を希望した広島市立小学校１校と広島市立中学校１校を評価対象校に決定し、実施しました。本委員会において、学校の状況に応じて評価の目的や評価する項目を定め、学校経営や学習指導等に専門性を有する学識経験者及び退職校長を含む評価チームを編成して、昨年１０月から学校への訪問調査等を行い、その後、学校と報告案に基づく協議を行い、この評価報告を作成しました。

この評価報告にある意見・提言を踏まえ、学校での主体的な学校経営や教育活動の充実・改善に向けた取組が進むとともに、学校の取組が促進されるよう、教育委員会の適切な支援が行われることを期待します。

平成２６年３月

広島市学校評価システム専門家評価
評価委員会　委 員 長　林　　孝
副委員長　曽余田 浩史
副委員長　髙妻 紳二郎

Ⅰ　評価目的

学校教育目標「つながりを大切にし、ともに生きる子どもの育成」の達成のために取り組んでいる「尾長小学校アクションプラン２５」などの教育活動や校長のリーダーシップ等を含めた学校経営の状況について、専門的な立場から客観的評価に基づいた助言を提供することで、学校改善の具体的な方向性を示す。

Ⅱ　評価項目

⑴　学校運営について
⑵　教職員について
⑶　児童について
⑷　家庭・地域と学校の関係について

Ⅲ　評価方法・作業

１　評価手法

今回の評価方法としては、「Ⅱ　評価項目」に関する情報を、学校及び教育委員会から提供を受けた資料、管理職員及び教職員等からの聞き取り、授業等の観察によって収集し、それらを総合的に分析した。

２　データ収集方法

データ収集対象	方　　法
学校管理職員	聞き取り、資料提供（学校評価に関するもの、児童の現状を把握するもの等）
教職員	聞き取り、授業等の観察
児童	授業等の観察、グループインタビュー
保護者	聞き取り
学校協力者会議委員	聞き取り
二葉中学校区の中学校長	聞き取り
その他（教育委員会）	資料提供（学校評価に関するもの、児童の現状を把握するもの等）

3　作業の経過

時期	内　　容	実施主体
4 月	・　専門家評価実施の通知、希望の受付	教育委員会
5 月	・　参考資料の収集・分析、対象候補校の選定	教育委員会
6 月	・　参考資料の収集・分析、対象候補校からの聞き取り（6/10） ・　対象候補校の選定 ・　評価委員会（評価対象校の決定） ※　電子メールによる会議	教育委員会 評価委員会
7～9 月	・　評価対象校から希望等の意見聴取（7/11） ・　評価委員会（評価目的、評価項目の決定、評価チームの編成） ※　電子メールによる協議	評価委員会
10～11 月	・　学校訪問調査（教職員からの聞き取り、授業等の観察他）（10/4, 10/9） ・　評価チーム会議（評価計画、今後の予定）（11/11） ・　学校訪問調査（教職員からの聞き取り、授業等の観察他）（11/11）	評価チーム
12 月	・　評価チーム会議（評価報告案作成） ※　電子メールによる会議 ・　学校及び教育委員会から評価報告案作成に向けた意見聴取 ※　学校訪問による意見聴取（12/17）	評価チーム
1 月	・　学校及び教育委員会から評価報告案に関する意見聴取	評価委員会
2 月	・　拡大評価委員会【評価委員会・評価チーム会議】（評価報告案他）（2/10）	評価委員会・評価チーム

4　評価者（評価チーム）

チーフ(評価委員)	髙妻 紳二郎（福岡大学　人文学部　教育・臨床心理学科　教授）
評価専門委員	財津　伸子　（比治山大学 非常勤講師、元 中学校長）
評価専門委員	平岡　満恵（元 小学校長）

Ⅳ　評価報告

１　評価・分析結果の概要

【総合的な評価と改善の方向性】

本校は長年、生徒指導上の厳しい実態が続き、日々の生徒指導に時間と労力が割かれてきた。そこでこれまでの本校の取組を基盤として、尾長小学校アクションプラン２５を作成し「つながりを大切にし、ともに生きる子どもの育成」を学校教育目標として掲げることで学校改善のベクトルをひとつの方向に向け、教職員一人ひとりの懸命な奮闘に手ごたえを得ることに成功しつつある。こうした努力の成果が今回の訪問時において随所に伺えたことは高く評価できる。なかでも重点課題である「安全・安心で一人ひとりが大切にされた学校づくり」という理念が職員間で共有されており、「チーム尾長」として学校全体が機能している好事例として位置付けられる。この姿は、校長の学校経営に臨む態度が職員に十二分に受け入れられ、校長の方針が浸透していることによるものである。

本校のチーム力を高めるために特筆される毎週火曜日の「作戦会議」や「やりきり目標」の設定、そして、それら協議の結果を職員暮会で広く共有するなどの工夫が定着していることとあわせて、そこでの協議の提案等について校長が可能な限り尊重し、職員一人ひとりの裁量にゆだねていることは、職員の学校経営参画の意識の醸成につながり、前向きに教育活動に向き合う風土に結びついているといえ、この点も本校の強みとして高く評価できるものである。

また、生徒指導に長年苦慮してきた経験を踏まえて、学校内における教育活動にとどまらず、年間1000件を超えるいわば「平時における家庭訪問」が日常的に行われていることは、他の学校の見本となり得る取組である。他の小学校には見られない「生徒指導規程」による取組は試行期間を含めるとこれまで３年間継続されており、如実にその成果が認められるようになってきてもいる。生徒指導が強く求められる個別ケースについては、まず学年で共有した後、生徒指導主事のサポートを得ながら担任による丁寧な個別指導が効果をあげている実態もみられる。そのプロセスにおいては養護教諭も適切に関わり、保健室や教室における指導が分断されることがないような良好なコミュニケーション関係が確立されており、ここにも本校の強みが十分に生かされていると言える。

ただし、「担任一人が抱え込まない」「チームで迅速に対応する」という原則は、ヒアリングした教職員にも自覚されており大きな強みであるが、そうしたメリットの裏腹として、「他人による指示を待つ」態度に傾斜したり、「個の指導力」が自律的に伸びていく余地に欠けたりするといったデメリットも見られる。今後は、これまでの取組の成果を基盤として、自信をもって個人の力を伸ばすという意識に転換していく必要が認められる。すなわち、担任としての個の力を育成すべく、直ちにチーム対応が必要となるケースをのぞき、学年間でいったんは担任の対応や工夫を見守ることもあり得るということである。本校におけ

る生徒指導が成熟してきている今、かかる視点をぜひ設定していただきたい。

授業づくりについては「授業づくり推進部会」が先導し、例えば生徒指導の三機能を意識した授業づくりが進められている。しかしながら、授業をクラス全体で作り上げているということができていないケースも散見されるとともに、授業のめあてが必ずしも明確になっていないクラスがあったことが残念である。生徒指導、あるいは授業規律を保つことが優先されるあまり、「教師と子ども、子どもと子どもがつながりあい、学びあう授業づくり」が達成できていない、もしくはなおスローガン止まりになっている点が惜しまれる。本校における学校教育活動の起点が授業であるとすれば、教員一人ひとりの教科指導力のさらなる増進に向けての戦略が練られてしかるべきである。幸い、他校の研修経験が豊富な教員も多くおられるので、ベテラン教員の知見・経験を披露しあい、若手教員の教科指導力の育成をぜひ意識してもらいたい。

地域に目を向ければ、依然として家庭背景が極めて厳しい子どもが一定数存在する実態には変わりがない。また、保護者の我が子に対する教育観も極めて多様化しており、ＰＴＡも、組織を挙げて本校の教育活動をバックアップする体制となっていない。地域や保護者による子どもの見守りやＰＴＡ活動等が、現在、関係者による懸命な努力によって、ようやく維持されている実態がある。したがって、学校と地域、保護者による「子どもを中心とした」取組の提案が早急に求められる。幸いにも、この数年の取組によって本校の生徒指導方針が地域へ受容されてきており、今後、学校から地域、保護者への働きかけがさらに模索されてもよい時期であると推察される。児童相談所や警察といった関係機関との連携を保つことはもとより、例えば「地域の方々と一緒に給食を」といったイベントを発信することを通して、地域の人的資源をさらに学校に投入することも考えられてよいのではないか。これらの実践は直ちには成果を求めることはせず、徐々にかかる風土を醸成していくという長期的な見通しをもつことが大切となる。学校が街づくりの一翼を担う役割を果たせるようにつながりを深めてほしい。

以上を踏まえ、現在の本校の教職員の努力をより生かすためには、次のことについて取組を検討していくことが望ましい。

① 「作戦会議」の存在を地域、保護者、児童にも周知させる。つまり、教職員が一丸となって本校の良さを伸ばすことに全力で取り組んでいることを内外にアピールすることである。

② 本校はこれまで生徒指導、生活指導の課題に取り組み、今後は学力向上を目指して授業研究に取り組もうとしている段階と捉えられる。現在は授業づくりについて幅広い情報を取り入れた状態で、めざす授業像と授業づくりの手立てが明確になっていない面が感じられる。今後、授業理論の整理を進め、本校のめざす授業像の明確化を図るとよい。

③ 本校の組織としての風通しの良さをさらに高め、教職員個々の取組成果について学年間はもとより学校全体で共有する機会を継続的に設定すること。

④ 一人ひとりの懸命な努力によって支えられていることも事実であるので、そのストレス発散、解消のイベントを管理職主導で設けてもよい。

【学校運営について】

○　管理職が教職員に対し肯定的対応をとっており、教職員の間には管理職に対する信頼感が見受けられる。これは校長が機会をとらえて自分の考えを明確に教職員に伝えていることが本校の支持的風土を形成することに寄与していると考えられる。そこでは校長からの一方通行にとどまらず、教職員一人ひとりの努力を評価する姿勢もある。リーダーとなる教職員（各主任）もその意向を十分に理解し、職員との橋渡し役となることで、校長が自分たちに仕事を任せてくれると感じており、学校運営への参画意識が高い。さらに、校長による経営方針の説明が、新任者へは全体での説明に加えて別途にもたれているなど、細やかな配慮が見られるのは素晴らしい。全てオープンにして見てもらうというこうした「ありのまま作戦」は、「見える学校にする」という校長のリーダーシップが適切に発揮されている成果である。

○　「作戦会議」から具体的な取り組みが提案され、各教員がそれを実行している。その結果、目的が共有され、実践の意識統一がうまれている。しかしながら、「作戦会議」のメンバーが固定化しているために「見えない作戦会議」となる心配がある。参加者を弾力的に考えたり、参加していない教職員に対して、結論のみを伝えるだけではなく、協議の内容を適切に伝え納得を得たりすることへの配慮が必要である。これは本校の特色でもあることだが、教職員間に、全校での取組について指示されたことはしっかりするという意識は強いが、自分からの実践の創意工夫は聞かれなかったことは残念な点である。

○　二葉中学校との連携は概ね良好であるといえるが、例えば本校が国語科において取り組んでいる実践的活動について中学校が感知していないことにはいささか問題がある。学びの継続性という観点からも、これまでの小中連携の取組が形通りに終始していないかどうか（形骸化）、常に点検しておく必要があるだろう。

○　生徒指導集中対策指定校における生徒指導に係わる２名の加配教員が児童の問題行動等にすぐに対応することによって、他の児童への影響を小さくし、落ち着きを保っている。そして、経験や技能が若い教員にＴＴとして生徒指導に係わる加配教員を配置していることは、今後もぜひ継続していただきたい。

○　毎月の修道院との連絡会や児童に変化があるとすぐに行われる家庭訪問など、児童の状況の理解を徹底して行うことが学校の姿勢として実施されている。

【教職員について】

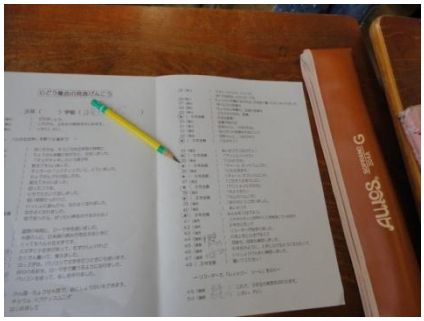
○　本校における教育活動が教職員共通理解の上で行われていることは、児童にとって大変幸せなことである。しかし、多くの課題を一つひとつ丁寧に解決していくためには児童の心の成長を保護者とともに考える必要がある。

○　上記内容とも重複するが、「作戦会議」の提案が具体的であり、教職員が行動のレベルで協力できていることは素晴らしい。また、週末の放課後、新任教員と学年主任、教務主任の自主研修会を行うなど、新任教員の実践力向上や気持ちの支えに結びついていることは高く評価できる。

○　特別支援が必要な児童の問題行動も、行動面では生徒指導主事が対応し、児童の行動への対応が整理されているため、どの教師も取り組みやすい環境にある。この組織体制も今後ともぜひ継続していただきたい。そのために管理職は教育委員会に対して粘り強く生徒指導主事の加配について要望していくことが求められる。また、特別支援教育推進委員会が主体となった取組が、個別の事象対応から特別支援の視点に立った授業づくり等を提案するように変わってきていることは、本校の確かな成長であると評価できる。

○　授業づくりについては新しい多くの情報が教員に提供されているものの、短期間でそれを自分のものとして実践されてはいないので、ぜひ研修を通してブラッシュアップを図ってもらいたい。

○　それぞれの授業では、全体への指示、話しかけ、個別への対応などで、生徒指導の視点から配慮した指導ができていて、児童は多くの学級で板書をきちんと書いていることは望ましい傾向である。



○　掲示物が多く作られ、児童作品も掲示してあることは外部者の訪問日にとどまらず、ぜひ本校のよい文化として引き続き継承していっていただきたい。

○　本校では教職員が生徒指導面で予防的にも対応的にも、小学校としては配慮しなければならないことが格段に多い状況が続いている。そうしたなかでの授業は、実に大変であると推察されるが、「忙しいのは自分だけでなく、他の先生方も頑張っておられるから」という発言もあり、教職員間で協力する意識が高いことは、他の「落ち着いている学校」で授業をしている教職員へ発信すべき事例である。

○　個別の授業では、国語辞典がよく活用され、熱心な指導が伺えた。ただ、教員がしゃべりすぎ発言が一部の児童に偏っている、せっかくの「めあて」がいかされていない、学習にふさわしい言葉づかいや環境が保たれているとはいえない（例：ある教室の音楽の授業では「いっせいので。」という言葉かけやオルガンが物置となっていたこと）等の課題が見受けられる。環境面の改善はすぐにでも着手できるが、授業改善の第一歩として、全員が平等にスキルアップするという意識ではなく、経験年数に応じて授業力をつけるという意識もあってよい。

○　生徒指導の三機能を意識した授業づくりについて、発問づくりの工夫と評価に取り組んでいる。生徒指導の三機能を意識した授業は、行動や形態から参加意識を育てる効果が高く、学習の質的な深まりや学力の定着については二次的になりがちである。発問は授業の柱であ

るが、学習が苦手な児童の学びの成立は「発問―発表―話し合い」だけでは難しい面があることに自覚的であってほしい。

○　児童の実態によるものであろうが、じっと考えさせる活動よりも行動させる授業が多いことが観察された。学校も授業も見られて変わる。見られると意見をもらう。それは、改善を求められることでもある、ということを自覚してほしい。

【児童について】

○　登校時、大きな声で挨拶している。立ち止まって頭を下げて挨拶する児童もいる。全員がこうした挨拶ができることを期待する。

○　ほとんどの児童は元気が良く明るい。だが、挨拶をする高学年女子児童の中に、顔は笑っていても目は笑っていないと一瞬感じる場面があった。心を開ききれない児童の心を解きほぐす教育の営みを進めてほしい。

○　児童会執行部児童は素直な態度で、中学生になる期待感が伝わってくるなど、概ね本校での学びや活動を肯定的にとらえている。また、先輩や自分たちの学校に良さを感じ、自己肯定感をもっている。論理的に話したり説明したりしようとしている姿勢は実に素晴らしいと言える。

○　様々なトラブルがいつでも起こり得ると考え、トラブルが起きやすい「すきま時間」を少なくするなど、予防的対策が学校組織として実行されている。

○　児童が教師に親和的であることも良い風土である。大休憩にほとんどの児童がグラウンドに出て遊んでいる（教師の指導もあり）。様々な背景を感じさせる児童がいるが、相互にいろいろな友達の存在を受け入れている様子が伺えた。

○　掲示物へのいたずらも見られず、個人の荷物が床に散乱していないなど、整理整頓が行き届いている。

【家庭・地域と学校の関係について】

○　本校は各種団体や機関等と連携がとれているといえるが、学校の考えを伝えていることと同様に、相手側からも細やかな事情を聴く機会を作りたい。特に、ＰＴＡの在り方は大きな困難に直面している。ＰＴＡ活動が執行部に集中して、保護者全体の組織的な活動になっていないことが見受けられることから、ＰＴＡが組織として機能を果たすようになることが何よりも児童のためになるので、ぜひ学校が主体的・積極的に協力して円滑な運営を実現してもらいたい。

○　地域との協力体制はほぼ確立しつつあり、地域の方が積極的に登校時の挨拶運動や、交通見守りに参加されている。

○　新任者の地域関係機関訪問は、本校では「地域連携スタート」として目的をもって実施されていることは注目に値する。また、若い先生を中心にＰＴＡ行事や地域行事に参加する教員が増えてきたようであるが、引き続き地域とのつながりを深めてほしい。

○　退校時刻が遅くなっていることが日常となっている実態は本校の大きな課題であり、早急に校内でも十分な話し合いの上、できるだけ負担軽減できるような効果的な展開の仕方を検討していただきたい。

○　交通事故の発生後、すぐに、学校が地域と連携して交通指導に毎日教員が立っているという。地域もその学校の姿勢を理解しているとともに高く評価している。社会福祉協議会等地域団体の会議会場として学校を提供して、それが学校への関心をもってもらうことにもつながっている。

○　毎月の修道院との連絡会、児童に変化があるとすぐに家庭訪問をするなど、児童の状況の理解のために、教員が頻繁に地域に出ている。このような日常的な学校の姿に対して、地域やＰＴＡは、本校の教職員は問題が芽の段階のうちにすぐに取り組み、そのことが現在の落ち着いた学校につながっていると評価していることは、本校の教職員にとって大きな自信としてよいことである。しかしながら、このように地域もＰＴＡも、本校の取組を高く評価しているものの、校長・教頭以外の個々の教員の名前や動きは具体的に上がる段階には至っていない。負担軽減をしつつも、一人ひとりの奮闘がしっかりと地域に具体的に伝わるよう粘り強い活動を期待したい。

２　意見・提言

評価チームは、上記の評価・分析結果に基づき、尾長小学校及び教育委員会に対して、次のとおり意見・提言する。

（１）尾長小学校に対して

多くは上述のとおりだが、以下では意見・提言として「学校運営」、「教職員・授業」、「生徒指導」、「家庭・地域との連携」の４領域に分けて記述している。

学校運営

○　年度当初に全体的な方針の共有はなされているが、本校の教育活動、生徒指導上の鍵となる教員に、校長がいつ・どこで・どんな声掛けをするかで学校経営方針の浸透度が異なってくるので、これまで継続している「作戦会議」をさらに大切にしてもらいたい。

○　校長は一般的な「目指す児童像」ではなく、本校の実態に即して、児童や保護者、地域の人たちにも伝わるかみくだいた表現で提示してみてはどうか。もちろん、達成可能な具体的な「児童の姿」を目標とすることが大切である。

○　小・中連携をさらに強化することが地域の協力を得ることにもつながる。現在、構造的関連性があまり意識されていないように見受けられるので、例えば小・中学校で研究テーマ等を同じにできれば効果が上がることが期待される。また、定期的な生徒指導主事の連絡会や中学校区校長会等を連携強化につながる意味のある情報交換の場にしていただきたい。

○　退校時刻の遅さが日常化している点について、教育委員会と十分な話し合いを持つとともに、早い段階での改善を図っていただきたい。

教職員・授業

○　上述のように、それぞれのクラスにおける熱心な指導が展開されている。「教員による説明中心の授業」、「一部の児童に発言が偏っている授業」、「めあてとまとめが結びついていない授業」など、こうした課題はあまり労力を必要としない授業研究・研修で解消されると思われる。例えば「道徳」の授業を全学級公開するなどし、引き続いて開催する懇談会で話題にすることなどが考えられる。

○　生徒指導の三機能を意識した授業づくりが進められている。生徒指導の三機能を意識すればするほど、本時の目標とその目標を達成するための発問や活動を明確にさせることが必要となる。本校では発問の工夫と評価に取り組んでいるが、「発問と連携した板書の構造化」を意識してもらいたい。板書は授業を写す鏡である。意識化することでさらに充実することが期待される。学習のいろいろな場面で「書くこと」を取り入れることに加えて、児童の書いたことから児童の学習意欲や理解度を把握し、授業に生かすことが一層望まれる。

○　考えさせる活動よりも行動させる授業が多いことは、指摘したとおりである。児童の発表に対して他の児童や教師のコメント等が少し添えられると環境効果が高まることが多いので、ぜひ意識してもらいたい。「協同学習」「協力学習」「協同的な学習」の異同について整理することで授業づくりの理解が深まることが期待されるし、例えば「発問―書く―読み合う」という深め方を「かかわり合う」授業の展開イメージとして取り入れるなどの考え方を共有して欲しい。協同的な学習に取り組んでいる学校の授業ビデオなどを活用して、授業像を全員ではっきりさせていくこと等も考えられる。

○　研修会等では講師や先輩教員に学ぶことにプラスして、教職員一人ひとりが自分の工夫・努力を発表・交流する場面も入れるとよい。そのほか、研修会を充実させるための方法として授業を録音する、コミュニケーション・間の取り方等を学ぶ、授業のまとめに生かす工夫を考える、先生に聞こえる声・隣に聞こえる声の大きさ、学年に応じて学習環境を整える、などの個別テーマにも取り組む価値がある。

○　校長は教職員のニーズをつかみ、より積極的に指導主事訪問を計画していただきたい。

○　掲示物にはベテラン教員の指導のあとが伺えるので、若手教員がそれらの掲示物を見ながらベテラン教員とともに学びあう機会をぜひ作っていただきたい。

生徒指導

○　「学校が楽しい」と回答する児童の割合が高いことは評価できるが、なにが「楽しい」のかの中身の分析が必要である。そのためには、評価アンケート等に記述欄を設けるなど、本校に合った評価項目・方法を検討してもらいたい。

○　児童は朝８時に入室するために指示を守って校舎外に待機しているが、冬季は可能なら、体育館に待機させる、運動、掃除、挨拶などの活動をローテーションであたらせるなどの工夫を取り入れたい。

○　授業中に他のことをしてしまう児童、落ち着かない児童が複数存在するクラスが見られたが、そうしたケースでは学習から逸脱した直後の１、２分間が極めて重要なカギを握っている。学習場面でそうした児童を無関係にさせない取組について、様々なアイデアを持ち寄る研修の場も設定することが求められる。

家庭・地域との関係

○　関係機関の声に耳を傾けることで、様々な思いが伝わってくる。それらの思いや要望を大切にすることは望ましいが、寄せられる情報が偏っていないか、常に点検しておくことが必要である。

○　上述した内容と重複するが、地域行事の参加について、日常的に多忙である若手教職員にその都度声を掛けるのではなく、関係機関から年間の予定を入手し、それを校内に示した上で、自分で参加できる行事を決定させるなどのプロセスを経てもよい。

○　地域の会合・行事等の会場として、学校の施設の利用を引き続いて可能な範囲で便宜を図ることを継続して欲しい。

○　地域もＰＴＡも学校の取組を評価していることをさらに深化させるために、例えば本校の教職員一人一人が継続的に行っている良い取組などをＰＴＡや地域の行事等でしっかりと紹介するとよい。これを習慣化すると、地域からも教職員が身近な存在となることが期待される。

○　ＰＴＡの学級役員決めの学級会には担任も同席し、発言は控えつつ状況を見守る姿勢を持ちたい。

（２）教育委員会に対して

広島市教育委員会に対しては、以上のような尾長小学校の現状にかんがみ、以下のような支援が強く求められる。尾長小学校の望ましい発展を促進するためには不可欠な支援であるため、ぜひ段階的に実現してもらいたい。

○　現在のようやく落ち着きを見せつつある状況は、尾長小学校教職員全員による懸命な取組なくしてはとうてい実現し得なかったことである。数年前の状況に比較して、こうした「好転した」ともいえる状況を何とか維持し、さらなる落ち着きを図るためには、生徒指導加配が不可欠である。現在の本校における様々な取組そのものが生徒指導加配により成り立っているからである。

○　人事上の配慮として、生徒指導経験が豊富であり、かつ、授業実践を牽引するミドルリーダーになり得る職員の配置を実現していただきたいとともに、教頭や主幹、各主任の現在の力量を維持し得るような世代交代のために、教育委員会による課題解決に向けた継続的な指導助言が必要である。

○　上記内容とも関わるが、校長・教頭・教諭の人事については自校昇任と転任のバランス、行動力のある中堅教員の確保が配慮される必要がある。現在の状況が、校長の指導力の下、それに応えた教頭、主幹、各主任、全教員の力で構築、推進されてきたからである。教職員の日々の努力がある限り、笑顔あふれる学校になると期待している。そこには教育委員会による人事配置や授業支援の充実が何よりも必要とされる。

○　経験豊富なベテラン教員や退職された管理職等から、ちょっとしたきっかけで崩れる弱さとどう向き合えばいいのか、本校の教職員に粘り強い指導の方法を伝える機会を設定していただきたい。教職員にも児童にも「頑張れ」というのは簡単である。学校支援の主体として「明日のために今日を大切にしてほしい」ということを、いくつかの実践例や好事例をもとにぜひ啓発していただきたい。

○　以上記してきたように、学校の努力だけでは十分な課題解決に至らないことも予想されるので、引き続き教育委員会による学校訪問を継続し、本校教育課題解決にむけてのニーズに

応じた指導助言を進めてほしい。

○　今後、尾長小学校において授業改善を進めていくために、児童理解に根差した授業改善の専門家を招へいするための予算措置（講師招聘旅費・謝礼金）をぜひとっていただきたい。

○　保健室来室者数が多く、養護教諭の対応が困難となっているため、養護教諭定数の制約はあるが、養護教諭の複数配置が実現されれば、改善されることが期待される。